

30pmF-648

在宅医療における薬局薬剤師の嚥下フィジカルアセスメントの有用性

○大西 孝宣¹, 大槻 智洋¹, 鈴木 大², 永田 久幸¹, 池野 隆光¹(¹ウエルシア関東, ²親孝会)

【目的】超高齢社会を迎え、ドラッグストア（以下：Ds）や薬局に勤務する薬剤師にとって、在宅医療への参画はもはや必須といえる。多職種連携の一環として、薬剤師によるフィジカルアセスメントが注目されているが、これまでに報告がある取り組みは、服薬後の薬効や副作用のモニタリングを目的としたものが多い。我々は、①薬剤師が調剤・交付した薬を、患者に確実に服用してもらうこと②誤嚥性肺炎の予防や口腔内状態の悪化など、服薬がきっかけで起こり得るトラブルを未然に防ぐことが、薬剤師の重要な役割であると考えた。今回、その手法として、嚥下フィジカルアセスメント（以下：嚥下PA）を導入し、有用性を検討した。

【方法】介護老人福祉施設において、Dsに勤務する保険薬剤師が聴診器を用い、頸部聴診により嚥下音と呼吸音を聴取した。普段、嚥下評価を行っている歯科医師の同行の下、あらかじめ同意を得ている高齢者を対象に、昼食時に行った。誤嚥の可能性があると考えられた高齢者については、医師・歯科医師・看護師・介護士・栄養士らと意見を共有し、服薬指導や治療計画などの具体的な対応につなげた。

【結果・考察】嚥下PAの導入により、不顕性誤嚥の発見に寄与するだけでなく、嚥下困難者向け調剤を行い、その高齢者に合った具体的な服薬指導ができた。嚥下PAを行った薬剤師からは、嚥下について自らの知識向上につながったという意見が多数寄せられた。在宅医療において嚥下PAを行うことにより、服薬の場面に直接、薬剤師が居合わせる機会が自然とつくられた。剤形変更を医師等へ提案するだけでなく、嚥下に関わる栄養士、介護士らとの連携が密になったため、有用性があると思われた。